慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生活意識と政治経済構造の関係とその変容 : 徳之島町井之川の事例より
Sub Title	
Author	泉, 暁(Izumi, Satoru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.132- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

デカルト=エリザベト，　2001，山田弘明訳『デカルト=エリザベト往復書簡』講談社
Foucault, Michel,　1976,　*La Volonté de Savoir* (*Volume 1 de Histoire de la Sexualité*), Éditions Gallimard, Paris.
（渡辺守章訳，1986，『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社
松尾信明，　2005a，「〈原身体〉像へ――『身体の社会学』への一アプローチ――」，『人間と社会の探究』第 59 号
――――，　2005b　（投稿中），「社会構築主義と『濃密な身体』――〈原身体〉像へ (II)――」
作田啓一，　1993→2001，『生成の社会学をめざして』有斐閣
竹村和子，　2004，「修辞的介入と暴力への対峙――〈社会的なもの〉はいかに〈政治的なもの〉になるか」，『社会学評論　特集・差異/差別/起源/装置』Vol. 55, No. 3, 172-188.

＊ 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

生活意識と政治経済構造の関係とその変容

～徳之島町井之川の事例より～

泉　　暁

1.　これまでの研究と生活意識論の意義について

私はこれまで，学部卒業論文「徳之島町井之川の「ハマオリ」行事を通しての人々の生活と関係への考察～人々の生活に接近するための理論考察をふまえて～」や，修士論文「生活意識からみる「親族」関係（鹿児島県大島郡徳之島町井之川の事例より）～「現-場-性」(reality, actuality) 理論の考察へ向けて～」に見られるように，鹿児島県徳之島町井之川を中心のフィールドとして，そこに住む人々の生活に近づくことを目的とし，理論研究も同時に進めてきた。現在は博士学位請求論文において，これまでと同様に徳之島町井之川を中心としたフィールド研究を行い，理論研究として，有賀喜左衛門，宮本常一らの研究を生活意識という観点から捉え直し，自身の「生活意識論」を展開させていきたいと考えている。

そして現在，徳之島町井之川のみならず神奈川県鎌倉市鎌倉山地域の昭和初期を中心とし現在に至る開発と既存の農漁村との関係についての地域研究や，有賀喜左衛門が継続して調査し続けた岩手県安代町石神ムラへの予備調査的フィールドワークなども行っている。それらは，人々が集い住まうことの歴史的変遷，そして現在の生活について，生活意識という観点から捉えようとするためであり，そのための予備考察となるものが，本研究である「生活意識と政治経済構造の関係とその変容」である。

本稿では，まず私の中心のフィールドである徳之島町井之川についての研究の過程を示し，今後どのように研究を進めていくのかということを示していきたい。

私が，徳之島町井之川に研究の意図をもって訪れたのは学部生の頃からであった。徳之島町は 26 集落からなり，井之川もそのなかの一つの比較的大規模な集落であり，島の中東部に位置する。井之川はさらに伝統的に，宝島（ホーシマ）・伊宝（イホ）・佐渡（サド）の 3 地区により構成されており，平成 10 年の時点において 246 世帯，推定人口 602 人である。私の両親はこの井之川で生まれ育ったが，私自身は，ごくわずかしかこの地で生活をしていない。このような微妙な立場にいる自分自身だからこそなしうることがあるのではないかと考え，修士論文においては，自身の生活史の記述も組み込んだ。それは私個人の「主観的」な体験として研究の上で捨象されるものでは決してないと考えている。そして，

この私自身の想いをも含みこみ対象とするなかで形成されるのが，現在「生活意識論」として展開させようと考えているところのものなのである。

理論研究として私は，学士論文において柳田國男とマックス・ヴェーバーを扱い，共に人々の内面をも重要な契機として捉えようとした理論であるとの観点から批判的に理論考察を進め，修士論文においては，木村敏の社会学批判を土台として，自己と他者の関係性への考察へと発展させてきた。これらの理論考察における観点は，「調査者」と「被調査者」との関係にも関するものであった。これまでのフィールドワークに関する理論においては，「調査者」自身の概念の精密化や，立脚する価値への批判などが中心となっていたように思われる。しかし，「調査者」自身も，「被調査者」との関係のうえで初めて「調査者」として成り立つ。「被調査者」からの影響を考えずに理論形成を考えることはできないのではないかというのが，一貫した私の考えである。前述の私自身の体験をも含みこみ，そして，また，社会調査論としても今後，展開していこうと考えている。

しかし，このような自己と他者の問題は，それを具体的な場面において考え直さなければ単なる思弁の遊戯となってしまいがちである。その具体的な場面において，自己と他者，集団，社会，文化の問題を展開していったのが，有賀喜左衛門や宮本常一らであると考える。彼らは，「調査者」・「被調査者」等と区別して考えるのではなく，共に「生活する人間」として捉え，相互理解を求めていった。その相互理解の基盤をなす「生活」こそが，有賀喜左衛門の解明しようとしていた「文化」だったのではないだろうか。有賀における「文化」とは，生活の反復性に目を向け，人間存在論として具体的・個別的場面を捉えていこうと意図したものであると私は考える。そのような意味において，私の研究は一つの「文化論」をそのねらいとしている。

そして，「生活意識」に着目するのは，それがこれまで述べてきた理論の展開であるとともに，井之川において生活する人々相互の関係と，井之川という集落との関係をもフィールドワークに基づいて，理論考察のなかで広げていきたいと考えてきたからである。現在は，井之川のみならず他集落と井之川，そして沖縄-奄美-本土との関係をその政治経済構造を中心として考察を進めている。

この「生活意識」という概念を用いるのは，現在の社会学の研究において，「個人」と「社会」の問題が，その媒介項を考えることなく極めて単純に接合されてしまっているのではないかと考えるからである。そこには生活のあり方という視点がない。共に生活を営むなかで，共に生きざるを得ない実情と，そのなかでの苦しみや喜びが，「個人」と「社会」の無媒介接合においては，きわめて単純で恣意的な表現しかなされないからである。例えば柳田國男の唱えた「シマ」概念は南西諸島に生活する人々の生活意識を集落という共同性の形成から考察しようとした概念である。しかし，この「シマ」概念が，研究上で実体化されるとき，「シマ」内部の重層性は隠され，また「シマ」相互の関係も見えなくなり，何ゆえにそのような「シマ」が形成されたのかという過程を辿ることもできなくなる。しかしまた，「シマ」内で生活する人々の「個人」としてのあり方のみを基本視座とするとき，そこでは，「シマ」と人々との関係が考察されなくなる。私は，「社会」も「個人」も実体化して捉えるのではなく，その媒介としてある具体的・個別的な「生活」の共同性のあり方に注目して，その関係性のなかで人々の「生活意識」を捉えんとしているのである。

2. 「ハマオリ」行事に見られる生活意識

私はこれまで井之川調査において「ハマオリ」という行事に注目してきた。それはこの行事が井之川

の生活のなかで最も重要視されているということのみならず，この行事のなかに井之川の人々の生活意識が端的にあらわれていると考えたからである。「ハマオリ」は盆以降の特定の日3日間をかけて行われる。井之川は島内で最も「ハマオリ」の盛んな地域である。井之川では，この行事は，親族が集い祖先であるウヤホーガナシを迎えて，酒・ご馳走を供え，共に浜遊びをするものとされる。その際にイエを単位とした集団によってヤドゥリという集いが構成される。私は，この行事のなかでヤドゥリに集う人々が「シキ」と呼ばれる親族構造を意識して集っていることに注目する。これまでの奄美に関する親族構造の研究は，この「シキ」構造と「ハロジ」構造を巡る研究の歴史でもあった。「シキ」とは，祖先との関係に基づいて自己の位置を認知・確認する ancestor-centered な概念で，「ハロジ」とは，両親の関係に基づいてイトコや兄弟姉妹ないしは限定された世代間での自己との親族関係を認識する ego-centered な概念であるとされている。そして，この「ハロジ」が奄美社会を規定していると考えられてきた。それは，奄美の固有性を強調するものでもあったが，「ハロジ」に注目するあまり，「シキ」つまりは「イエ」観念が逆に軽視されてしまったのではないかと私は考える。

私は，この「ハマオリ」行事に自身も参加しつつ，それぞれのヤドゥリ構成員が，自らの帰属をどのように意識しているのか，そして日常生活においてどのような関係をもっているのかということについて聞き取り調査を中心に行ってきた。そこでわかったのは，「シキ」として意識される人々の結びつきの強さだけでなく，その「シキ」の構成が非常に多種多様でフレキシブルなものであったということである。あるヤドゥリにおいては同じ「シキ」であっても親族関係が意識されていなかった。別のヤドゥリでは，本家・分家の差が明確に意識されていた。また同じ「シキ」であるにもかかわらず，土地を巡る争いから異なるヤドゥリに分かれたものもおり，そこでは，互いに異なる「シキ」であることが強調されていた。つまり，「シキ」が非常に強く「血縁」・「同族」として意識されていながらも，その実態とは非常にかけ離れているのである。それは現在，生活上での協働がもはやなくなり，生活実態からは離れた「シキ」観念が，人々を結びつけるものとして機能し，彼らの言説において巧みに利用されているということを意味しているのではないだろうか。

3. 今後の研究について

この生活における協働のあり方の変化は，井之川のみを見ていたのでは理解することはできない。そこには，戦後，米軍統治下における産業構造の急激な変化と，さらに復帰後現在まで続く，復興基金，補助金頼りの行政・生活のあり方が密接に関連している。それは奄美の生活の特徴の一端を示すものでもあり，また島嶼経済とはいかなるものかを考えることにもつながる。

そこで，現在継続中ではあるが，今後の研究として，井之川での生活を，戦後期を中心とした政治経済構造の全体との関連を踏まえ捉えていきたい。そのために，各町で選出される町会議員と各集落での生活の関連，それらの共同意思の決定のあり方に注目してみたい。例えば井之川ではそれぞれの地域ごとに班長とよばれるリーダーがおり，その班長がそれぞれの地域の利害を代表して町会議員となっていた。しかし，戦後の補助金行政による政治経済構造の変容により，町会議員の選出は地域利害から離れ，ある特定の国会議員たちの派閥の利害へと変わっていく。そのなかで，さきほどみた「ハマオリ」行事なども人々の集い方のうえで，派閥利害に大きく影響されることとなった。人々の生活に，この政治経済構造が密接なかかわりをもっているというのが，奄美を考えるときの一つの重要な視点であると考える。

現在，補助金行政の行き詰まりや，それに伴う派閥の力の弱体化により，現在奄美は大きな変動期を迎えている。そのなかで人々がどのように生活を営んでいるのかということを，これまでの政治経済構造への考察を踏まえ，徳之島を離れ生活している人々も対象とし，ライフヒストリーの聞き取り調査を中心に，考察していきたいと考えている。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

言語的社会化論の再構成に向けて

椋　尾　麻　子*

研究目的

本研究は，言語の獲得とアイデンティティとの関連を，理論的に再検討する試みである。言語とアイデンティティとをめぐっては，バーステインの言語的社会化論やブルデューの文化的再生産論をはじめ，教育社会学で多くの研究蓄積がある。だが，グローバリゼーションや社会の多様化が進むなかで，公共性やリベラリズムといった観点からのさらなる検討が迫られていると思われる。また，文化研究 cultural studies および批判的教育学の知見も，日本の教育社会学の文脈ではこれまでさほど取り上げられてこなかったことから，これらの検討も課題となるだろう。本研究は，上記に挙げた諸潮流を整理するとともに，S. ホールの「アーティキュレーション articulation」をめぐる理論や，R. ローティらが論ずるリベラル/ネオ・プラグマティックな教育論を検討することにより，言語的社会化論の読みかえ，再構成を企図するものである。

研究概要

本年度は，特に社会化と政治性との関連に着目し，研究を進めた。それは，従来の，二つの（突き詰めれば一つ――「国民国家」なるもの――に収斂されるであろう）視座に対する違和感にはじまるものである。

第一の視座とは，言語と（ナショナル・）アイデンティティとを論ずる際にしばしば「国語」たる言語の体系を重視するものである。こうした議論は，たとえば国民国家成立過程と国家語の制度化との政治的関連といったかたちで数多く存在する。また，外国籍児童・生徒に対する教育をめぐって，アイデンティティの確立とナショナルな言語体系（日本語および彼/彼女らの「母国語」）習得との関わりで問題化され，議論が展開された。そこではマイノリティのケースに着目されがちであり，マジョリティ/メインストリームはいわば無徴の存在とされる。確かに，たとえば「日本」社会における「日本人」にとっての言語―アイデンティティの関連は，ネイションの一要素としての言語という自明性をナショナリズムの思想，理論，歴史的分析によって問うことでは論じられてきた。しかしながら，個人の社会化あるいはアイデンティフィケーションの過程については，ある意味一般的なものとして自明視され，十分に検討されてはこなかったのである。裏を返せば，マイノリティは一般的でないがゆえに現実的には排除されてきたことを意味する。

さらにいえば，ナショナルなものと言語との関わりは，（たとえば「国語」というような）言語体系の